

# ひよくれんり 7

*Cbizuru & Masamune*

---

なかゆんきなこ

*Kinako Nakayun*



エタニティ文庫

目次

ひよくれんり7

5

柏木優月の日常

275

書き下ろし番外編

柏木家の食卓には

323

ひよくれんり7

プロローグ 〈人生という名の航海〉

人の一生を航海にたとえたのは、誰だっただろうか？

確かに、人生は航海に似ている。

未来という港を目指して、誰もが皆、大海に船を漕ぎ出ししているのだ。

そして、その航路は航海の途中で変わっていく。

もちろん、子どもの頃に抱いた夢を変わず追い続けている人もいる。でも私の場合は、大人になるにつれて次第に定まっていって、って感じかな。

それまでは、酷く漠然としていた。

幼稚園の頃は、アイドルになりたいなんて言っていたっけ。あと魔法少女とかね。憧れでした。

だけどそれは現実味のない、ただの夢でしかなかった。

小学生の頃は、うーん……。大人になったら結婚して、子どもを産んでお母さんになるんだらうな〜と、ぼんやり思っていたかな。

中学生の頃も似たような感じだ。はっきりしたビジョンはあんまりなくて、大人になったら働いて、いざれ結婚するんだらうなあって、うっすらと考えていた。

当時は将来の話より、友達のこととか漫画のこととか、アニメやらゲームなど、その時を楽しむことばかり考えていた気がする。

高校に入ってから、趣味に勤しんでいました。

すっごく楽しかったけど、今思うとオタク一色の青春時代だったなあ。中には思い出したくない黒歴史も……。うん。

さすがに三年生になってからは、慌てて進路を考えて勉強を頑張った。だけど、具体的な目標を持たず大学時代を過ごして、結局地元の本屋さんに勤めたんだよね。

本が大好きだったから本屋さんの仕事は楽しかったし、一生懸命働いた。でも、この本が大好きなんだって思うと不安で、あまり考えないように目を背けていた。

……。うわあ。こうして振り返ってみると、私の人生って大人になるにつれ定まっていっていったというより、大人になってからも定まっていなかったんだ……。霧に

覆われた見通しの悪い海で、ただ漂っていた日々。

そんな私に大きな変化をもたらしたのは、旦那様——正宗さんとの出会いだった。

旦那様との出会いは、お見合いの席でした。いつまでもぼんやりしている娘に業を煮

やした母親に、有無を言わず連れ出されたんだよね。

かしわぎ

そこに現れたお見合い相手が、イケメン高校教師の柏木正宗さん。

彼はすらっとした長身で、優しそうな顔立ちにサラサラの黒髪の眼鏡男子だった。

オイオイオイ、こんなに恰好良い人なら、お見合いなんてしなくてもいくらでも結婚相手が見つかるでしょうよ！ きつと、付き合いで断れなかったんだろ？ 私なんかがお眼鏡にかな適うわけがない。

そう思うほど、正宗さんは私には過ぎた人だったのだ。

その時は、理想の眼鏡男子を一目見られただけで良しとしようと考えていた。だけど、まさかまさかでそのあともデートをして、まさかまさかで結婚を前提にお付き合いし、まさかまさかで、結婚することになったのです。

正宗さんとの結婚は、これまでの人生で一番の衝撃……だったかも。

そしてこれをきっかけに、私の航海はようやく航路が定まったのでした。

私の名前は柏木千鶴ちづる。

今年の四月で三十七歳になる、兼業主婦です。

お隣の奥さんがやっているカフェでパートをしながら、二つ年上の旦那様と、六歳の息子と家族三人で暮らしています。

旦那様の正宗さんは、私立高校で日本史を担当する教師。弓道部の顧問もしていて、土日も部活のために出勤することがあり、すごく忙しい人です。でも、家族思いでとても優しい、私なんかにはもったいない旦那様。

四十路よそじを間近に控えて渋味が増し、ますます恰好良くなったというか、大人の色気が滲じみ出るようになったというか……

い、いまだにときめいてしまうんですよね。

……って、これじゃただの惚気おろけだ！ すみません！

対する私は平々凡々なので、釣り合わない夫婦だなあ〜と、常々思っています。

私の容姿は十人並み。身長は百五十二センチで、胸は……ささやかです。

母親譲りの少し色素の薄い髪は、いつも肩上でキープ。ずっと同じ髪型ですが、これが一番しつくりくるんですよねえ。

他に特筆することと言ったら、男性同士の恋愛が大好きな、腐女子ふじしってことくらいでしょうか。

ええ、いまだに大好きですよ。たぶん一生好きでいますよ！

BLのない人生なんて考えられません！

……それはさておき。

私達の間に生まれた一人息子の優月ゆづきは、外見は父親似、内面は母親似だとよく言われ

ます。特に食いしんぼうなところが私そっくりだって。ひ、否定できないのが辛い。時に我儘わがままを言ったり駄々をこねたりすることもありますが、名前に込めた願い通り、優しい子に育ってくれました。なんて、親馬鹿ですかね。

そんな優月も、なんと今年の四月から小学一年生です。

ついでの間まで、オムツをしていたような気がするのになあ……

月日が経つのはあつという間ですね。

この調子で、すぐに中学校、高校と進んでいくのでしょうか。

子どもの成長が嬉しいような、ちょっぴり寂しいような、複雑な気分です。

そんなこんなで優月もだんだんと手がかからなくなってきました。しかも、働き始めの頃はスタッフが少なくてついつい無理をしてしまったカフェの仕事も、人手不足が解消されて余裕が出てきたのです。なので、そろそろ二人目を作っても……なんて、正宗さんと話しているところなんですよ。

優月もずっと、弟か妹が欲しいって言ってましたからね。

我が家に新しい家族が誕生する日も、そう遠くないのかもしれないかもしれません。

愛する旦那様と可愛い息子がいて、自分の好きな仕事ができている。

私は、随分と幸せな生活を送っていると思う。

そしてこれからも、妻として母として家族を支え、共に生きていく。

それが私の幸せであり、ようやく掴んだ人生の指針なのです。

大人になったら結婚して、母親になる。子どもの頃にぼんやり描いていた将来と同じ道筋ですね。

だけど、それはあの頃のように漠然ぼくせんとしたものじゃない。

確かに自分で選びとった、人生の航路なのだ。

大きな夢ではないかもしれない。

ささやかで、平凡な夢かもしれない。

でも、私はこれからもずっと、こうして家族と一緒にたくさんの方々の幸せを感じながら生きていきたい。

きつとこの先も幸せなことばかりが待っているのだと信じていたんです。

そう、家族と共に穏やかで幸福な人生を歩めると思い込んでいた。

そのため、私はすっかり忘れていたのです。

人生とは、航海のようなもの。

順風満帆じゆんぷまんぱんに進む時もあるれば、大きな嵐に見舞われる時もあるんだ……ってことを。

親離れ、子離れ？

先日、我が家の一人息子である優月が無事に幼稚園を卒業いたしました。

別の小学校に行ってしまうお友達もいるので、優月は卒園式で泣くかもなくなりなんて思っていたのですが、当の本人はけろっとしたものの。

卒園式の日は、笑顔でお友達に「ばいばい」でした。あっさりだな！

そして代わりに号泣してしまったのが……ハイ、正宗さんと夫婦揃って参加していた私です。

お友達と声を合わせて歌っている我が子の姿を見ていたら、急にぶわわっと涙が溢れてしまいましたですね。

だって、入園した時はあんなに小さかったのに！

それが今ではこんなに大きくなって！ って、色々な想いが込み上げたのですよ。

正宗さんが回して下さっていたビデオカメラには、私の鳴咽おなげもばっちり入っちゃっていました。は、恥ずかしい……

そ、それはさておき！

優月も来月からは、いよいよ新生活が始まるわけです。

それに伴ともないまして、我が家は本日『家庭内ぶちお引越』をします！

具体的には、私が使っていた二階の一部屋を、優月の子ども部屋に変更するのです。

優月が「ぼくも自分のへやがほしい！」と言いつ出したのは、去年の暮れのことでした。

幼稚園のお友達の中にもう一人部屋を持っている子がいて、話を聞いて羨うらやましく思っただようなんです。

優月も四月には小学生ですし、入学に合わせて、私の部屋を明け渡すことになりました。

話が決まってからは、入学準備と併行して子ども用の家具を探したり、私の部屋に置いていた本や荷物を整理したりと、ちよつとずつ準備を進めていきましたよ。

部屋の本棚にぎっしり詰まっていた漫画や小説は、これを機に少し手放しました。

正宗さんも、自分の蔵書を若干処分してスペースを作って下さったので、一部は書齋に置かせてもらい、あとは本棚ごと寝室に移しました。

そして、どうしても手放せない！ けれどおおっぴらに本棚に置いておくには……という一部の腐ったコレクションは、寝室のクローゼットにこっそり隠しております。

この部屋に置いていたテレビはだいぶ古いものだったので、テレビ台と一緒に処分してしまいました。嫁入りの時に実家から持ってきていたローテーブルも、優月は使わな

いと言うので、思いきって処分です。

なので、家具のなくなったこの部屋はとてがらんとしております。

なんだか、感慨深いですね……

正宗さんと結婚してから、ずっと使わせてもらっていた一人部屋。

それを手放すことについて正直、寂しい気持ちはあります。

ですが元々、ここははずれ子ども部屋にと考えていましたからね。とうとうその日が来たのかと、子どもの成長を嬉しく思いますよ。

今まででありがとうの気持ちも込めて、しっかりと掃除しましょう。

優月も自分の部屋だからと、はりきってお手伝いしてくれていますよ。

最後に二人で畳の上を乾拭きしていたら、階下から正宗さんの声が響く。

「千鶴さん、家具が届きましたよ」

「優月の机とベッド、届いたって！」

「やった〜！」

今日のこの時間帯に届けてもらうように、家具屋さんに依頼していたのですよ。

正宗さんに案内されて部屋に入った二人の業者さんが、まずは学習机を設置しようとする。

「あのね、ここ！ ここにおねがいします！」

優月が目キラキラさせて、業者さんをお願いします。

部屋の間取りは、優月が考えたんだよね〜。

チラシの裏に何度も描き込んで、学習机はここ！ ベッドはここ！ って、自分一人で決めたんです。

業者さん達は優月の指示通り、学習机を壁際に設置してくれた。

ちなみにこの学習机は、私の両親が買ってくれたものなんです。優月も一緒に家具屋さんに行って、自分で選んだんだよね。

温かみのある木製で、棚とデスク、引き出しのワゴンがそれぞれ分離しているため、好きな組み合わせで配置できる。

揃いの椅子は、成長に合わせて高さを変えられるタイプだ。どちらも造りがしっかりしているので、これから長く使っていけるだろう。

「奥さん、こっちはどうしますか？」

学習机の設置が終わってすぐ、業者さんが声をかけてきた。

「あ、これもこの部屋にお願いします」

業者さんが次に運んできてくれたのは、大きな段ボールに入った荷物が二つと、梱包材に包まれたマットレス。

段ボールの方には、組み立て式のタンスとベッドが分解された状態が入っています。



どちらも優月が家具屋さんで選んだ、自分用の新しい家具だ。

「じゃあ、やりますか」

業者さんを見送ったあと、正宗さんがはりきって腕まくりする。

家具の組み立ては、正宗さんが主戦力ですからね。

あ、もちろん私も手伝いますよ。

二人で嚴重な梱包を解き、説明書と睨めっこしながら、タンスとベッドを組み立てていく。

そんな中、優月は組み立てが気になってしょうがないらしく、正宗さんの周りをうるちよろしている。それじゃあ正宗さんの邪魔になっちゃうでしょうが。

「優月、ちよろちよろしないの」

仕方がない。優月には、豊んだ段ボールや纏めた梱包材を一階に運ぶ任務を与えましょう。

「頼んだよ、優月！」

指示をしてからびしっと敬礼して言えば、ノリの良い我が子はびしっと敬礼を返して「わかったであります！」と答えた。

自分も何かしたくてしょうがないんだよね。

その意を汲んで、優月が戻ってからは正宗さんも、簡単な作業を手伝わせていました。

そんなこんなで家族総出で取りかかったタンスとベッドの組み立ては、一時間半ほどで終わった。

学習机と似た色合いの、木製のタンスとベッド。

タンスは四段で、引き出しの前面だけ濃い青に塗られている。そしてベッドは、成長に合わせて伸縮させることができるタイプだ。

「おおう！」

完成した家具を前に、優月は感嘆の声を上げる。

うんうん、わかる。新しい家具って、こう、わくわくするよね。

でも、まだこれで終わりじゃないですよ。剥き出しのマットレスにシーツを敷き、新しいお布団と枕を置く。

それからカーテンも、新品に変更！ 優月が選んだ、紺地にシルバーの星模様がちりばめられた、可愛いデザインのものだ。

枕カバーも布団カバーも青地なので、部屋の中は全体的に青系で纏まっている。

これはなかなか良い感じ！ と、母もご満悦です。

お引越しいったらやっぱりお蕎麦なので、作業後のお昼ごはんにお蕎麦を食べました。鴨肉とネギをたっぷり使った、鴨南蛮にしてみましたよ。

そして午後からは、優月の荷物を新しい部屋に移す作業に入りました。

実家の両親が買ってくれたピカピカのランドセルを、学習机の脇にかける息子。それを横目に、私は絵本を棚に並べる。

ああでもないこうでもないという悩みながら新しい部屋に荷物を詰めていく優月は、とても楽しそうだ。

そんな優月は、お気に入りのぬいぐるみをタンスの上に置くかベッドに置くか迷って、結局タンスの上に置いていました。

午後からの作業は、ほとんど優月が一人でしましたね。私と正宗さんは、そのサポート役です。

そして夕方には無事『ぶちお引っ越し』が完了しました！

「良い部屋になったな」

正宗さんに頭を撫でられつつそう言われ、優月は「えへへ」と満面の笑みを浮かべる。

初めての『自分だけの部屋』を前に、優月はすごく嬉しそうだっただ。

そうして、夕食の時間です。

「お疲れさま」

朝から、掃除やら家具の組み立てやらで忙しかったですからね。

今日はちょっと手抜きをさせてもらって、夕ごはんはスーパーのパック寿司ずしと稲荷寿司いなりです。

あ、お吸い物だけは作りました。

大人二人はビールで、優月はジュースで乾杯！ 一日の労をねぎらいます。

「あー、美味しい」

スーパーのお寿司ずしって、安いのに結構美味しいから、好きです。

サビ抜きのお寿司ずしを頬張る優月も、ご満悦の様子。

正宗さんもくっくとビールを飲み干して、はくっつとため息を吐きます。ふふっ、良い飲みっぷりですね。

今日一番肉体労働をしたのは正宗さんですから、どうぞどうぞ、たくさん飲んで食べて下さい。

「はい、正宗さん。もう一杯いかがですか」

「ありがとうございます」

正宗さんのグラスに、トクトクトクとビールを注ぐ。

「千鶴さんも、どうぞ」

そうしたら、正宗さんも私のグラスにお酌しやくを下さった。

「ありがとうございます！」

うーん。やっぱり労働のあととはほんとお酒が美味いすなあ！  
甘じよっぱい稲荷寿司も、ビールに合う〜。

「……それにしても、優月もとうとう一人部屋か〜」

私は口いっぱいにお寿司を頬張っている我が子を見ながら、感慨深く呟いた。

これまでは、ズーっと親子三人川の字で寝ていたから、ちよっぴり寂しいですねえ。

「優月、大丈夫？ 本日に今日から一人で寝られる？」

「大丈夫だよー。ぼく、もうすぐ小学生なんだよ？」

優月はそう言って、えへんと胸を張る。

むしろ、新しい部屋で寝るのが楽しみでしょうがないと言わんばかりの顔だ。

むー。寂しいと思ってるのは私だけ、なのかなあ。

そして、その日の夜。

正宗さんと一緒にお風呂に入った優月は、早々に自分の部屋へ引っ込んでしまった。

二人のあとに入浴を済ませた私は、お風呂上がりに優月の部屋を覗いてみる。すると、

優月は新しいお布団に包まってすやすやと眠っておりました。

その穏やかな寝顔に安心する反面、やっぱり……寂しい！

はあ。こうやって、子どもはどんどん親から離れていくのか。

ううう、地味に辛い。子どもの成長は喜ばしいことなのに、寂しいよ〜。

あああ、私って結構子離れできてなかったんだなあ。

そんな感情が、ばつちり顔に出てしまっていたのだろう。

寝室に入ると、ベッドで横になっていた正宗さんに、「浮かない顔ですね」と言われた。

「はい……。正宗さんは？ 優月が一人部屋になって寂しくないですか？」

ベッドに入りつつそう尋ねたら、正宗さんは「うーん……」と微笑を浮かべた。

「俺は寂しいというより、喜ばしい気持ちの方が強いですね」

「はあ」

旦那様は、優月の成長を前向きに受け止めているみたいです。父親と母親じゃ、感じ方も違うのかな？

「それに……」

「んっ？」

突然ぐいと肩を抱かれ、正宗さんの方に引き寄せられる。

「また千鶴さんと二人つきりになって、嬉しいですよ」

ほあああああああああああああああああ！

ちよっつ、あのっ！ そういうセリフを腰にくるような低い声で、囁かないで下さいい

いいいいい！

めっちゃドキドキしたわ！

で、でもそっか。今までは、優月がいるから寝室ではその、夫婦の営みをあんまりしていなかった。

だけどこれからは、ここで……

(ま、正宗さん……)

ここで私と、セ、セックスをしたいって……思ってくれているんだ。

私を抱き寄せている旦那様の顔を、じっと見つめる。

眼鏡越しの、まっすぐな視線。その瞳に熱を感じてしまうのは、私の気のせいじゃない……よね？

「正宗さ——」

皆まで言わず、正宗さんの唇が私から言葉を奪う。

「んっ……」

ふにっと柔らかい唇が合わさり、続いて熱い舌先が口内に押し入ってくる。

「……あっ、ん……」

やばい、気持ち良い……

キスだけでこんな感じるなんて……

すっかり骨抜きにされた私に、正宗さんはくすつと笑って、囁いた。

「大丈夫。寂しいと感じる暇もないくらい、愛してあげますから」

ぴゃあああああああああああああ！

ちよつとSっぽい顔でそんなこと言われたら、私、私……！

呆気なく快楽の海に落ちてしまいますから！ ドボンですから！！

「はう……。よ、よろしくお願いします……」

って、何をお願いしてるんだ私！

脳内でセルフツッコミをしている間に、正宗さんは手際良く私の寝巻を脱がしていく。そして生まれたままの姿にされた私は、シーツの上に押し倒され、胸を弄られた。

「あっ……」

正宗さんは私の反応を楽しむみたいに、いやらしい手付きで胸やお腹、お尻を撫でていく。

くうう、やっぱりSだこの人！

だけど、焦らすようにやわやわと身体中を撫でられるのは、もどかしくも気持ち良い。時々ゾクッと背筋が震えて、たまらない気持ちになってしまう。

「ま、正宗さん……」

私はもつと……と先をねだるみたいに、自分の上に覆い被さっている旦那様に手を伸

ばした。

少し乱れた浴衣の襟元から手を這わせ、硬く引き締まった身体に触れる。

「……………」

あっ、胸の頂を撫でたら、正宗さんがくっくと堪えるような顔を見せた。

男の人もここ、感じるんだね。ふふ、可愛い。

「んっ」

調子に乗った私は、自分からキスをしつつ、正宗さんの胸の頂をくにくくと弄り始める。

えっと、最近読んだBL漫画に、そういう描写があったような？

確か、こう、カリカリッと爪で擦るみたい……

「っ、ち、千鶴さん……」

「あっ」

これ以上はもう、と言わんばかりに、正宗さんが私の胸にむしゃぶりついてきた。

「やっ、あっ、あ……ん」

両手を掴まれ、頭の上で押さえつけられてしまっている、やり返すこともできない。

「ひう……っ」

唾液をたつぷりと含んだ舌先で舐め上げられ、敏感な頂を甘噛みされて、悲鳴じみた声を上げそうになる。

だけど、隣の隣の部屋には優月がいるのだ。大きな声を出したら、それで起きてしまうかもしれない。

こんな声を聞かせるわけにはと、私は必死に堪える。

「……………こんなに勃たせて、可愛いですね」

けれど、Sツ気が増してしまった正宗さんは、ぶくりと勃ち上がった胸の頂にふーっと思を吹きかけた。

「っ!?」

ひやうううううう！

それだけで、背筋にゾクゾクツツと快感が走る。

「も、もう……………」

「千鶴さんは、今日はここをたくさん苛めてほしいんですよね？」

にっこりと笑う正宗さんは、私の胸にかぶりと齧りつく。

軽く甘噛みされて、きゅんっつと下腹の奥が疼いた。

「ち、ちが……」

私としましては、その、はしたなくもですね、下も弄っていただきたいのです

が……！

しかし、正宗さんは私の欲求を承知しているだろうに、あえて下には触れてくれない。「とりあえず、胸だけでイッてみましょうか」

ぎゃあああ！ 正宗さん意地悪です！

こ、こんなイイ笑顔でそんなこと、言わないで下さいよー！

「うう……」

「泣きそうな顔も、すごく可愛いですね」

私の<sup>またた</sup>瞼にちゅつとキスをした正宗さんは、胸だけの刺激で私が絶頂を迎えるまで、<sup>あい</sup>愛撫の手を休めなかった。

それから、しばらくして――

「はあ、はあ……」

ううう、本当に胸だけでイッてしまいました。

さんざん胸だけを攻められ、シーツの上でくったりとする私に、正宗さんは満足そうな笑みを向ける。

くそう。悔しい。

だけど、そんな旦那様もやっぱり好き！ と思ってしまう自分は、本当にもう、どう

しようもない。

「も、こっちも触って下さい……」

これ以上焦<sup>じ</sup>らされるのは辛くて無理！

私は、自ら正宗さんの手を下腹の奥へ導いた。

「んっ……」

自分以外の体温が、敏感な場所に触れる。

それだけで、焦<sup>あふ</sup>らされまくったソコは滴<sup>たぎ</sup>を溢<sup>あふ</sup>れさせる。

早くきて、もつと触って……と誘<sup>いざな</sup>うみたいに。

「ぐちゃぐちゃのところがですね」

どこかうつとりとした声音で、正宗さんが<sup>つおや</sup>呟く。

彼の長い指先は、くちゅり……と奥に沈み、やがて私のナカを<sup>か</sup>掻き回すように犯し始めた。

「んっ、んんっ……」

「はは。すごく気持ち良さそうな顔だ……」

うううう、だって気持ち良いんだもん！

ずっとこんな風に、指でぐちよぐちよに掻き回されたかった。

耳に響くいやらしい水音が、私からなけなしの理性を<sup>ひま</sup>奪<sup>は</sup>っていく。

「もっと、して……」

「……はい」

熱で潤んだ瞳でおねだりをすれば、正宗さんはこくりと喉を鳴らし、笑みを深めて頷いた。

そして私の茂みに顔を埋めると、今度は唇と舌先で愛してくれる。

「うっ、うっ、あ……」

指先での愛撫とはまた別の感触に、私はさらなる快楽を感じてしまう。

次第に声を堪えるのが辛くなり、自分の指を噛んで必死に耐えた。

「ん、んん……」

それなのに正宗さんは、じゅぶっ、ちゅぶ……つと、わざと音を立てて滴を吸い上げる。

そうして私の反応を窺いながら、一番敏感な芽を舌先で舐め上げたのだ。

「ん、んんっ！」

旦那様の執拗な愛撫に、私は再び絶頂を迎えてしまった。

頭が真っ白になるほどの、強烈な快感。

それを与えてくれた正宗さんは、熱っぽい眼差しでこちらを見つめている。その唇を濡らしているのは、私の滴なのだろうか。

そう思うと、いつそう背徳感が込み上げてくる。

「ふ、あ……っ」

いまだにぼうつとしている私の太ももを掴んで、正宗さんは硬くそそり立つ自身を秘所に宛がった。

ソレに避妊具は着いていない。

そろそろ二人目の子どもをと夫婦で話し合い、最近では避妊をしなくなったのだ。

直後、果てたばかりの蜜壺に熱い楔が挿し込まれ、これだけでまたイッてしまいうまくない、強烈な快感が私を襲う。

「うっ」

声を我慢するために指を噛んでいたら、正宗さんがそれをとって、代わりに唇で口を塞いだ。少し乱暴に動き回る舌が、この人にもあまり余裕がないことを教えてくれた。

身体の奥も口内も、旦那様に犯され、獣みたいに無我夢中で求められる。

それが気持ち良くて、嬉しくてならない。

「はあ……っ」

最奥まで身を沈めた正宗さんは、切なげに息を吐く。それから徐々に激しく、上から叩きつけるように腰を動かした。

ぱんっ、ぱんっ肌と肌が合わさる音が響く。

ベッドがギシギシと揺れ、交わりの激しさを物語る。

(あつ、もう、……い、イッチャいそう……!)

叩きつけられるごとに快楽が高まり、果ての気配が近付いてくる。

そして私は、呆気なく――

(んっ、あああああ!)

正宗さんと唇を重ねたまま、三度目の絶頂を迎えたのだった。

果ての瞬間、私の蜜壺は絞り取るみたいにきゅうつと正宗さんを締めつける。

「くっ……」

唇を離れた正宗さんはわずかに体勢を変え、ゆっくりと腰を打ちつけると、ようやく私のナカに精を吐いた。

「あっ……」

ナカに出される感覚と、そのあとずるりと楔が抜け出していった動きで、私はまた軽くイッてしまう。

は、恥ずかしい……

だけど正宗さんは、よくできましたと言わんばかりに、優しく私の頬を撫でた。

「可愛いですね、千鶴さん……」

「あう」

そして唇にキス一つ。

それはさっきまでの奪うような口付けじゃなく、労うような、触れるだけのキスだった。

次の日は正宗さんも私も仕事なので、今夜は一回でおしまい。

だけど正宗さんが言った通り、寂しさを感じる暇もないくらい濃厚な一夜でございました……

お、思い出しただけで赤面しちゃう。

そんな私とは違い、身を清めて浴衣を着直した正宗さんは、情事の気配などこへやらという雰囲気だ。穏やかかつ爽やかなお顔で横になっている。

普段はこんな風に優しげなのに、ベッドでは時折、意地悪になる旦那様。

ま、まあ。そういうところも大好きなんですけどね!

なんて思いながら私も寝巻を着直して、ベッドに入る。

そして部屋の灯りを消したあと、すすすつと、正宗さんに寄り添った。

正宗さんは嫌な顔をせず、さりげなく私の頭を自分の胸に乗せてくれる。

うへへ、胸枕だ。腕枕してもらうのも好きだけど、胸枕も好き!

これまでは間に優月がいたから、こうやって二人で寄り添って眠るなんて、久しぶり



だなあ。

優月の親離れはちよつと寂しいけれど、確かにこんな風に、夫婦の時間をゆつくりもてるのはいいことかも。

寂しい寂しいって言つてばかりいないで、状況を前向きに楽しんだ方がお得だよね。これからは、寝室で正宗さんといちゃいちゃし放題だ！

なーんて、思つていたら――

「ん……？」

遠くで、襖の開く微かな音がした。

優月がトイレに起きたのかな？　と思いつつ、耳を澄ましていたところ、足音は徐々にこちらに近付いてくる。

(んん？)

そしてカチャリと寝室の扉が開いたかと思えば、か細い声が「お父さん、お母さん……」と私達を呼んだ。

「どうしたんだ、優月？」

正宗さんは身を起こして、そう尋ねた。

私も起き上がつて部屋の灯りを点け、扉の方を見る。すると、優月がもじもじと恥づかしそうに立っていた。

もしかして、おねしょでもしちゃったのかな？

そう考えていたら、優月が口を開いた。

「あの、あのね。ほく、まだ小学生じゃない、からね」

「うん」

そうだね。小学生になるのは来月からだ。

「だからね、ほく……。まだお父さんとお母さんといっしょがいい……」

優月はくしゃりと泣き出して、そう言った。

あらら……

私と正宗さんは、顔を見合わせる。

あつさり親離れしていったと思つたうちの息子ですが、一人で寝るのは寂しかったよ  
うです。

慣れないベッドで目が覚めて、急に怖くなっちゃったのかな。

「そっか。それじゃあ、お母さん達と一緒に寝よう」

私が笑つておいでおいでと手招きすると、優月はくくんと頷いて、そろそろと近付いてきた。

そして布団に潜り込んで私達の間に入りつつ、「ほく、ちゃんと小学生になれるかな……」と不安そうな顔で言う。

たぶん、一人で寝られないと小学生になれないのかもしれないと心配なのだろう。

「大丈夫だよ」

正宗さんが安心させるように、優月の頭をよしよしと撫なでる。

「ほんと？」

「ああ、本当だ」

その言葉と、頭を撫でる手の温もりに安心したのか、優月はホッとした顔を見せた。そしてほどなく、すう、すうと寝息が聞こえてくる。

「……………」

まだまだあどけない、我が子の寝顔。

この分じゃあ、もうしばらくは夫婦二人っきりの夜は難しい…………かも？

私達は顔を見合わせて、くすつと笑ってしまったのでした。

### 優月の入学式

四月初旬のある日。私は小学校を前にして感嘆の声を上げていました。

「おお…………」

ついに、ついにこの日がやってまいりましたよ…………！！

校門の前には、紙製の花で囲われた『入学おめでとう』の立て看板。

そう。今日は優月の小学校の入学式！ なのです！！

優月が通う地元の公立小学校は、我が家より徒歩で二十分ほどの距離にあります。

式の前に校門前で写真を撮ろうと少し早めに出てきたものの、すでに周りにはちらほら新入生とその家族の姿が。

「あ、空あきましたよ。千鶴さん、俺達も写真を撮りましょうか」

「はい！！」

正宗さんが声をかけて下さったので、返事をしてそちらへ向かいます。

今日は平日なのですが、幸いなことに正宗さんの勤務先である高校と、行事の日程が被からなかったのです。なので、正宗さんは半休がとれて一緒に入学式に出られることに

なりました。

記念撮影の人気スポットである校門前が空いたので、私達もそこで写真を撮ります。まずは優月一人ではしゃり！次は私と優月のツーショットを撮影します。その次は正宗さんと優月のツーショット。最後は近くにいた方に撮影をお願いし、家族三人で撮りました。

「ありがとうございます」

撮影して下さった方にお礼を言って、ささっとその場から離れます。場所が空くのを待っていらつしやる方達がいましたからね。

少し離れた場所で、さっそくデジカメを確認です。

「おー、よく撮れています」

写真の優月はどことなく誇らしげな顔で、満面の笑みを浮かべている。

今日の優月は、子ども用のチャコールグレーのスーツ姿。ズボンの丈は七分で、足元のピカピカの革靴は、入学のお祝いにと幸村先生と臙さんが贈って下さったもの。

幸村先生こと幸村真さんは、正宗さんと同じ高校に勤める養護教諭で、正宗さんとは中学校時代からのご友人です。人懐こくて明るくて、とても良い人だ。

そして臙さんこと水無月臙さんは、幸村先生の同性の恋人。プロの日本画家で、はつと目を引く中性的な美人さんです。

お二人とは家族ぐるみの付き合いで、よくお互いの家を行き来している。

お二人とも優月のことを我が子のように可愛がって下さっていて、優月も懐いているんだよね。特に臙さんとは相思相愛で、正宗さんや幸村先生が時にやきもきしちゃうほど仲が良い。

お二人にも、今日の優月の晴れ姿を見せてあげたいな。帰ったらさっそく、写真をメールで送ろうっと。

それから私達は受付を済ませました。

ここで優月とは別行動になります。新人生は上級生のお兄さんお姉さんに連れられて、入場前の待機場所へ。

私達保護者は、先に会場である体育館に入ります。

早めに来たので、まだ席がたくさん空いていますね。

「はあ……。なんだか私の方が緊張してきちゃいました」

パイプ椅子に座って、ため息を一つ。

この場の雰囲気の良いところがあるのでしようが、胸がドキドキしています。

子どももの入学式に出るの、これが初めてだからな。

自分が子どもだった時のことは、遠い昔すぎて記憶が曖昧です。

覚えているのは、上級生のお姉さんに花飾りを胸につけてもらって、すごくドキドキ

したことからいかな。そういえば、優月もさつき受付でつけてもらってたっけ。

「ふふっ」

その時の、優月の緊張で固まった顔を思い出したら、笑いが込み上げてきました。だってあの子、それまでは元気にはしゃいでいたのに、上級生のお姉さんを前にした途端、大人しくなるんだもの。

「千鶴さん？」

急に笑い出した私に、隣に座っていた正宗さんが「どうしたんですか？」と小声で尋ねた。

「すみません。さっきの、受付での優月のことを思い出したら、笑いが……」

「ああ。確かに、あれは……」

そう言って、正宗さんも笑う。

「ですよね」

私もくすくすと忍び笑いを漏らした。

はあ、おかしい。おかげで、緊張が和らぎました。

しばらくすると、空いていた保護者席も埋まっていき、いよいよ開会の時間を迎えた。教頭先生の開会の言葉のあと、担任の先生を先頭に、新入生が二列になって入場してくる。

その中に、優月の姿を見つけた。

優月は緊張した面持ちで、ぎこちなく歩みを進めている。

私達の近くを通り過ぎる時、通路側に座っていた両親に気付いたらしい。優月ははにかんだような笑みを浮かべ、こちらに向かって小さく手を振った。

（わあああああ！ もう!! うちの子可愛い！）

そんな親馬鹿全開なことを、心の中で大絶叫ですよ！

しかも、そう思っていたのは私だけじゃなかったみたい。

新入生の入場が終わったあと、正宗さんは私にこそりと耳打ちしてきた。

「緊張してる優月も可愛いですね」

って。もう、正宗さんったら。親馬鹿さんですね。

まあ、私も人のことは言えないんですが！

そんな愛しい息子が今日から小学生かうと思うと、胸がいっぱいです。

「私もそう思います」

正宗さんの耳にこそっと囁く。そして、私達はくすすと笑い合った。

入場後は、国歌斉唱、各クラスの担任の先生の発表に続き、先生方からお祝いの言葉が述べられた。

そして次は、新入生達の見せ場でもある『入学児童呼名』がある。担任の先生がそれぞれ受け持ちのクラスの生徒名を読み上げ、新入生は自分の名が呼ばれたら元気良く「はい！」と返事をし、起立するのだ。

うふう……、優月はちゃんとお返事できるかなあ。

入場時には緊張してみたいだし、ちよっぴり不安です。

私はドキドキしながら、次々と名前を呼ばれる子ども達の姿を見守る。

元氣にお返事する子もいれば、かろうじて聞きとれるくらい小さな声でお返事する子もいた。

うんうん、こんなにくさんの人がいる前でお返事するのって、緊張するもんね。わかる、わかるよ！と、なんだかよその子まで応援したくなってくる。

「佐藤元気くん」

「はいっ!!」

一際大きくお返事をする子がいて、保護者の間から「おっ」というどよめきがかかる。名前の通り、すごく元気な子だなあと思っていたら、隣に座っていたお母さんが「あの馬鹿……」と呟いた。この人が元気くんのお母さんなのかな？

びっくりしちゃうような大きな声だったけど、良いお返事でしたよ。

そしていよいよ、優月のクラス、一年三組の番になる。

優月達の担任の先生は、若い男の先生だった。爽やかで、優しそうな先生である。

あ行の名字から順番に名前を呼ばれ、ついに行。か行の始まりの生徒は、優月だ。

「柏木優月くん」

きたー！

「ひゃ、ひゃいっ！」

ん？ んん!?

声はとても大きくて、元気なお返事だった。けれどあの子、囁みおったー！

肝心要の見せ場で、囁んでしまいましたよ。

しかも立ち上がる時にぶつかったらしく、ガタッと椅子が揺れる音も響いた。

(おうふ……)

なまじ声が大きかったものだから、優月の「ひゃいっ！」はみんなの耳に届いてしまった。

保護者席に、くすくすと笑いが広がる。

「可愛い」とか、「囁んだな」「囁んでたね」という囁き声も聞こえてきた。うちの子つたら、佐藤元気くんに次ぐ目立ちぶりですよ。

優月、大丈夫かなあ……

ここからは優月の小さい後ろ姿しか見えないけれど、あの子は今どんな気持ちでいる

んだらうか。

もしかしたら、すごく落ち込んだりして居るかもしれない。あとでフォローしてあげないと。

そんなハブニングがありつつも、入学式はつつがなく進み、閉式の時を迎えた。

入学式のあとは、保護者も交えてクラスごとに記念撮影を行う。

撮影場所は、体育館のステージ前に作られた階段状の壇だ。

最前列の中央に担任の先生と校長先生が立ち、子ども達は前列、保護者はその後ろに並ぶ。

それが終わったら、保護者と子ども達は一緒に教室に移動だ。

子ども達はそれぞれ自分の家族と教室に向かうので、私達もようやく優月と話ができる。

「優月、元氣にお返事できてえらかったな」

そう言って、正宗さんは優月の頭をよしよしと撫でた。

「……でも、ぼく、『ひゃい』って言っちゃった……。『はい』って言おうと思ったのに。ドキドキしてね、ちゃんと見えなかったの……」

優月はしょんぼり顔だ。

ああ、やっぱり気にしてたんだ。

どうフォローしたものかと考えていたら、正宗さんが口を開いた。

「確かに『はい』とは言えなかったけど、優月が一生懸命お返事しようとしたことはちゃんと伝わってきたよ。だからお父さんは、優月のお返事、すごくかっこいいと思った」

「かっこいい？ 本当……?」

「ああ。すごくかっこよかったぞ、優月」

「……! ありがとう! お父さん!」

あらら。しょんぼり顔が一転、満面の笑みです。

これは、私の出番はありませんでしたね。

それに……私だったら、何と慰めていいかわからなかったもの。

(さすがです、正宗さん)

やっぱりこういう時、お父さんは頼りになりますねえ。

たとえば私が同じ言葉かけたとしても、正宗さんから「かっこいい」って言われた方がよっぽど心に響くだろうしね。言葉の重みが違うというか。

正宗さんの言葉で元氣を取り戻した優月は、にこにこ顔で教室に入った。

ここが、これから一年間優月が学ぶ教室か。

わあ、机も椅子も小さい。大人になってから見ると、びっくりしますね。私も遙か昔は、こんな小さな机と椅子で勉強していたのか。なんだか不思議な気分だ。

机に名前を書いた紙が貼ってあったので、子ども達はそれに従って自分の席に座る。私達保護者は、教室の後ろの方に立って先生を待った。

なんだか授業参観みたいですね。

しばらくして担任の先生がやってきて、改めてご挨拶。

そのあとは教科書や学習品が配布され、明日からのスケジュールについて簡単な説明があります。

それが終わったら、解散です。

私達は人が少なくなるのを待って、教室で記念撮影をしました。

在校生からの入学祝いのメッセージが書かれた黒板の前で、パシヤリ！

新しい教科書を持った優月は、誇らしげにカメラに笑顔を向けます。

自分の席に座る優月の姿も写真に収め、私達は帰路につきました。

帰りの校門は、これから写真を撮る新入生や保護者で賑わっている。

式の緊張から解放された子ども達は明るい顔ではしゃいでいて、その様子を見守る保護者達も、とても嬉しそうだった。

うんうん。今日はまさに晴れやかなお祝いの日、ですもの。

自然と笑顔になるってなもんです。

帰宅後、私達は簡単に昼食を済ませる。

メニューは朝ごはんを作る時に一緒に用意しておいたサンドイッチと、卵とワカメのスープです。

正宗さんはこれからご出勤ですからね。手早くぱぱと食べられるものがないかなと思っ

て。

勤め先の高校も明後日に入学式を控えているので、お忙しいのだとか。だから、優月の入学式に来てもらうのは申し訳ないかな〜と思っ

ていたんです。でも、正宗さん本人がどうしても行きたいと言っ

て下さったので、半休をとってもらいました。優月にとって一生に一度しかない、特別な日ですもんね。

こうして三人で参加できたこと、とても嬉しいですよ。

(ありがとうございます、正宗さん)

ぱくぱくとサンドイッチを頬張っている正宗さんの顔を見て、感謝の気持ちが込み上げてくる。

「うちそうさまでした」

サンドイッチを食べ終えた正宗さんは手早く支度<sup>しやく</sup>を済ませると、すぐに職場に向かう。

「それじゃあ、いつてきます」

「いつてらっしゃい。気を付けて」

「約束の時間までには帰りますね」

「はい」

今夜は優月の入学祝いのため、ささやかながら食事を開く予定なのですよ。できるだけ急ぎます、と付け加えて、正宗さんは家を出ました。

さて！ 私達も学校でもらってきたものを片付けたり、プリントに目を通したりと、することは色々ありますよ。そうそう、今日撮った写真をさっそくプリントしましよな。

あ、そうだ。幸村先生達にもメールで送らなくっちゃ。それから、東京で暮らす弟の雲雀<sup>ひばり</sup>にもメールで写真を送ろう。

雲雀は甥<sup>おひい</sup>子である優月のことをとても可愛がってくれています。この前も入学祝いにと、男の子達の間で大人気のランニングシューズと図書カードを贈ってくれたのです。雲雀は仕事があつて今日の食事会には来られないので、入学式の写真を添えて、改めて優月と私からお礼をメールで送りました。

「……よし」

メールを送り終えたあと、デジカメで撮った写真を我が家のプリンターで印刷します。うちのアルバム用と、実家の両親に渡す用と、幸村先生達に渡す用と、三枚ずつ。

その間に教科書などを片付けていたら、印刷が終わっていました。

お渡しする用はそれぞれ封筒に入れて……っと。

「ふう、終わった終わった」

次は明日以降のスケジュールを確認です。

教室でも説明があつただけだね。改めて。

最初の数日は学校での生活ルールを覚えるのがメインで、帰宅は午前中なんですよ。なので、私もその間はカフェでの仕事を早めに取り上げてもらうことになっています。

「あ、見て優月。明後日は学校探検だつて！」

スケジュールが書いてあるプリントを指差して言うと、優月は「おお」と嬉しそうな声を上げた。説明によれば、六年生のお兄さんお姉さんが学校の中を案内してくれるとのこと。

「楽しみだねえ」

「うん！ 早く学校行きたい！」

あらあら。帰って来たばかりなのに、もう学校に行きたくてしょうがないみたいです。この子はこれから、どんな小学校生活を送るのかな。



友達、いっぱいできるといいね。

勉強……は、できるに越したことはないけど、まだ一年生だしね。怪我や病気をしないで毎日元気に通ってくれたら、それで十分かなあ。

「お母さん？」

優月をじーっと見つめながらそんなことを考えていたら、「どうしたの？」と声をかけられた。

「ううん、なんでもなーい。ただ……」

お母さんも、これから始まる新生活が楽しみだなあって、そう思っただけ。

### 旦那様の看病

それは、優月の入学式を終えて間もなくの日曜日のこと。

私は朝から布団の中で唸うなっていました。

「うう……っ」

喉のどが……痛い。

しかも、鼻水がズルズルなのです。ティッシュユティッシュ！

身体が熱くって、そのくせゾクゾクッ！ と悪寒おかんが走ります。

まずい。これは、完璧に……

「……風邪……だあ……」

無事に優月の入学式を終え、ホッと気が抜けたせいでしょうか。

昨日の夜からどうも身体の調子が悪いな。風邪の引き始めかなあ？ なんて思っていたら、がっつり悪化ひどしてしまいました。

一晩でこんなに酷ひどくなるとは！

うう……。様子見とか言っていないで、ちゃんと薬を呑んでおくべきだった！

今日は正宗さんと優月と、三人でお出かけする予定だったのに。

「はふ……」

でも……無理だあ……

頭がガンガンする。その上、身体が重く動けない。

「……千鶴さん……?」

いつまでも布団から出ない私に、先に起きて身支度を済ませていた正宗さんが声をかける。

「まごむねや……」

うわ、声酷っ！ 我ながら、すごいガラガラ声だ。

話すのも辛いよ。つていうか、呼吸するだけで喉が痛い！ っっそ呼吸したくない！

「大丈夫ですか?」

「ずびぜ……っ。おでがげ……できな……」

「そんなことはいいんです！ 待って下さい」

そう言って、正宗さんは寢室から出て行った。

すぐに戻って来た正宗さんの手には、我が家の薬箱が。

「まずは熱を測りますよ」

電子体温計を渡され、私はそれをもそもそと脇に挟む。

そうしている間に、正宗さんは袋から取り出した冷却シートをピタッと私のおでこに貼ってくれた。

ふはあ……。冷たくて、気持ち良い……

ぼうっとその冷たさに浸っていたら、体温計がピピッと音を鳴らす。

ごそごそと取り出した体温計の表示を見れば、三十八度五分と表示されている。

わあお。予想以上に高かった。

正宗さんは、体温計を見て厳しい顔をする。

「すぐに病院に行きましょう。準備するので、待っていて下さい」

お、お手数おかけしますううう……

かくして私は、よろよろの身体を正宗さんに支えられながら、休日診療の病院に連れて行ってもらったのでした。

そして数時間後。

病院で「風邪」と診断された私は、寢室のベッドで大人しく寝ていた。

処方してもらった薬を吞んで、少し眠ったおかげか、ちよっとは楽になりました。

まだゴホゴホと咳は出るし、喉は痛いんだけどね。まあ、そんな劇的に良くなるからねえ。